

2020年度バグウェッシュ公開講座
Zoom ウェビナー開催

2021年1月29日(金)
16時30分～18時00分
報告 千葉 眞(政治思想史専攻)
国際基督教大学名誉教授

第3回 戦後日本の平和主義の今日的意義
——リチャード・フォーク『パワー・シフト』を手がかりに——

はじめに

・まず初めに去る1月22日に、核兵器禁止条約が50の批准国・地域で発効したことを喜びたい。核不拡散条約(NPT)が、現在瀕死の状態にあるが、何とか起死回生の動きに繋がることを切に願う。そのためにも今後とも日本政府に強く働きかけていく必要がある。

I. フォークの問題提起のいくつか

・本日のコメンテーターの前田幸男さんのイニシヤティヴで、フォーク著『パワー・シフト』(岩波書店、2020年)の翻訳に5名の共訳で携わることができた。1930年生まれのフォークは現在90才、原著の執筆時は85才。大いに刺激を受けた。長年にわたり世界的に積極的に活躍してきた稀有な行動する研究者。

・「訳者あとがき」→いくつかの本書のテーマと議論を説明。

(1) 旧来のハードパワーの政治(HP) vs. それを疑問視し乗り越えようとするソフトパワーの政治(SP)。その対立→ここ数十年の国際政治を特徴づけてきたと認識。「日本語版への序文」の冒頭で、フォークは次のように述べている。「『パワー・シフト』の中心的主張は、軍事的に弱い国々を脅し、強さと力によって戦略的目標に従わせるよう強要する軍事支配と強制的外交に頼るよりも、国際法の忠実な遵守と合意に基づく地政学への想像力に富んだ信頼によって、二一世紀の国家安全保障は決まるというものである」(xv頁)。しかしまた、状況と場合における軍事力の一定の意義を全否定するわけでもない。

・HPの特徴→①テロリズムの脅威、核兵器の拡散、自然環境の悪化、気候変動の危機などを「地球工学的応急処置」(geo-engineering fixes)によって解決しようとする。②科学と技術、進歩と合理性、国家中心主義、軍事主義、技術革新、経済成長への固着によって駆動される政治。③近代性(modernity)のイデオロギーを大前提とす

る。例、道具的合理性、国家中心主義、軍事的安全保障、核抑止力へのコミットないし依存など。

・SPの特徴→①ハードパワーではなく、ソフトパワー、つまり、理念や道徳、文化や教養、対話や説得、交渉や協定、平和的外交や修復的外交、立憲主義、国際法重視など、軍事力以外の選択肢によって紛争解決と平和構築を目指すアプローチ。軍事力への専一的な依存とは異なる試み。フォークの用語では、basic human needs, humane global governance, common security, non-violence などの重視。その背景には、現在のハードパワーに依拠する軍事強国（アメリカ、中国、ロシア、北朝鮮など）にもかかわらず、冷戦後、20世紀末以降、現在に至る国際政治と国際世論→徐々にHPからSPへと変化してきたという時代認識がある。

・フォーク→この時代認識→軍事的支配と強制的な外交を骨子とする古い地政学に対抗して、それに代わる「人々とソフトパワーの新しい地政学」を探求する。この geopolitics の変容の認識→世界秩序の地政学的次元の脱軍事化への移行、「国家中心」(state-centric) の政治から「地球中心の政治」(geo-centric) への移行を目指すアプローチ。気候変動と地球温暖化によって引き起こされる自然災害の大規模化 (anthropocene／人新世の時代の最大テーマ) や今回の新型コロナ・パンデミックへのより適切な対応 (脱炭素社会や世界への移行) を可能にするアプローチ。人間中心主義的な産業文明とその価値観からの脱却という価値転換を含む。大気、大地、海洋、森林といった非ヒトとヒトとの共生を目指す新しい地政学。これは国益を越えて、人類益、そしてさらに地球益を追求するものと言いかえることができよう。

Cf., 「宇宙船地球号」(spaceship Earth)、「ガイア」(Gaia／James Lovelock) としての地球 (ヒトと非ヒト、生命体と非生命体が有機的に一体化、両者の共存を要求する地球) に近いのではないか。しかし、なかなか地球温暖化対策に真剣になれない諸政府→本書の末尾の最終章で、フォークは「人類種は生き残りたいと考えているのか疑わしい」と警鐘を鳴らしている。

・そしてこうした人類益や地球益を追求し、その実現を目指す担い手は、国連や諸国の政府にとどまらず、地球市民社会の重要なアクター、つまり「市民巡礼者」(citizen pilgrims)／「非暴力の戦士」として行動する「ポスト国家主義的な」グローバル市民) だとする。

(2) このHPからSPへの転換。日本国憲法の前文と9条の平和主義を高く評価。坂本義和先生など日本人の友人知人を通じて、ずっと以前から日本国憲法を高く評価していた。日本の「平和憲法」→「国権の変化を反映した政治的指導者の戦略的野望と外交政策に対して、平和な未来のための奮闘を先例にするというメッセージ」(xvii頁)。安倍政権下の第九条改定の試みを「懐古的な心情」、「退行的なプログラム」と批判。

・さて日本国憲法へのこの十年程の安倍政権の取り組みをここで振り返っておきたい。E.g., 第9条改憲の試み（2012年自民憲法改正案、2017年5月3日安倍首相「9条加憲」声明）、日本版NSC（国家安全保障会議の創設2012年）、武器輸出三原則の撤廃（2014年）、安保関連法の強行制定（2015年9月19日）、大学や研究機関における軍事研究の奨励など。菅内閣も憲法改定路線の踏襲を明言。

II. 深瀬忠一氏（1927-2015年）の「平和的生存権」論

・次に平和的生存権の意義を再確認しておきたい。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から生存する権利（right to live in peace）を有する」（憲法前文）。

・深瀬著『戦争放棄と平和的生存権』（岩波書店、1987年）。*昨年、次の本が出版。稲正樹・中村睦男・水島朝穂編『深瀬忠一とともに——深瀬忠一の人と学問』（教文館、2020年）。

・深瀬憲法学の「平和的生存権」の定義→「戦争と軍備および戦争準備によって破壊されたり侵害ないし抑制されることなく、恐怖と欠乏を免かれて平和のうちに生存し、またそのように平和な国と世界をつくり出してゆくことのできる核時代の自然権の本質をもつ基本的人権であり、憲法前文、とくに第九条および第十三条、また第三章諸条項が複合して保障している憲法上の基本的人権の総体である」（上記『戦争放棄と平和的生存権』、227頁）。

・深瀬氏の議論→一部、フォークの議論を先取りし、また共有している。現代の国際政治を支配している強国の「ハードパワー・リアリズム」を、「ソフトパワー・リアリズム」と恒久平和を追求する「アイディアリズム」によって、どうやって突き破っていけるのかという問題意識を保持。さらに「平和的生存権」→日本国民だけでなく、世界のすべての人々の普遍的人権として理解されるべきであると主張。

・フォークより一歩先を行き、「一方的イニシアチブ」や「一方的軍縮」と呼ばれた手法（1960年代と70年代の平和研究で一部主張され議論された）をとることで、相互不信による軍拡の悪循環を止めるため、一方的にでも軍縮を推進し、その実行例を通じて平和への意志を表示し、信頼を回復し、相互の軍縮へと舵をとろうとする国際政治学的方法を提起している。

・この「一方的イニシアチブ」や「一方的軍縮」の考え方→ふたたび取り上げられるべき時機（モーメント）を迎えている。グテーレス国連事務総長の2018年の「軍縮アジェンダ」→「世界の軍事予算と軍備競争は拡大しつづけ、冷戦時代の緊張状態が、より複雑さを増した世界に再び出現している」とし、軍縮と核不拡散が国連の喫緊かつ中心的な仕事だと述べた。

おわりに

・新しい生存の政治に向けて→「生存の政治」(politics of survival) のホッブズのパラダイムからポスト・ホッブズのパラダイムへの転換の必要。ハードパワーによる国家安全保障に基づくホッブズの「生存の政治」から、日本国憲法前文の「平和的生存権」に基づくソフトパワー重視の「生存の政治」。

・そして①「平和的生存権」とともに、②「社会的生存権」(社会福祉・社会保障の強化)をも擁護し強化していく必要がある。憲法第25条1項「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」。

・さらには今日、①「平和的生存権」(right to live in peace)、②「社会的生存権」(social right to live well)に加えて、とくに社会と世界の構造的格差の広がりや気候変動の危機に直面する現在、③「基礎的生存権」(survival right to meet basic human needs)、④「環境的生存権」(survival right to live with ecological justice)が必要になってくる。④は Gaia としての地球の行く末にかかわる問題で、日本国憲法の射程を越えている。

* 参考資料 Robert Frost, "The Road Not Taken," 1916. (「選ばれなかった道」)

ロバート・フロスト「選ばれなかった道」(1916年) *

黄色い森の中で道が二つに分かれていた

残念だが両方の道を進むわけにはいかない

一人で旅する私は、長い間そこにたたずみ

一方の道の先を見透かそうとした

その先は折れ、草むらの中に消えている

それから、もう一方の道を歩み始めた

一見同じようだがこちらの方がよさそうだ

なぜならこちらは草ぼうぼうで

誰かが通るのを待っていたから

本当は二つとも同じようなものだったけれど

あの朝、二つの道は同じように見えた

枯葉の上には足跡一つ見えなかった

あっちの道はまたの機会にしよう!

でも、道が先へ先へとつながることを知る私は
再び同じ道に戻ってくることはないだろうと思っていた
いま深いためいきとともに私はこれを告げる
ずっとずっと昔 森の中で道が二つに分かれていた。
そして私は… そして私は人があまり通っていない道を選んだ
そのためにどんなに大きな違いができたことか

Robert Frost, "The Road Not Taken" (1916)

*Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both
And be one traveler, long I stood
And looked down one as far as I could
To where it bent in the undergrowth;*

*Then took the other, as just as fair,
And having perhaps the better claim,
Because it was grassy and wanted wear;
Though as for that the passing there
Had worn them really about the same,*

*And both that morning equally lay
In leaves no step had trodden black.
Oh, I kept the first for another day!*

*Yet knowing how way leads on to way,
I shall be telling this with a sigh*

Somewhere ages and ages hence:

*Two roads diverged in a wood, and I took the one less traveled by.
And that has made all the difference.*